

自己発達概念に基づく刺激閾値の明確化

—感覚プロファイル（SP）検査から手縛る自己統合へのアセスメント—

林 知代

1. はじめに

精神分析的心理療法を進めるにあたり、発達の概念は不可欠であり、さらにどのような発達論に基づいてセラピストがクライアントに関与するのかによっても応答性に違いが生じると思われる。Stern D. は、それまでの研究者の臨床観察所見による推論の飛躍に基づく視点ではなく、乳児自身の主観的・社会的体験、つまり他者との関わり合いにおける主観的体験である情緒的側面からの発達論を展開し発達領域の概念を取り入れることによって、個々人の発達過程に相違があることを解りやすくした。本論では D.Stern の発達的視点に基づく精神分析的心理療法におけるアセスメントの際、有効だと思われるツールとして国際的に広く利用されている感覚プロファイル（SP）日本版を使用する意義を、事例を紹介しながら明らかにしたい。

2. 自己感発達の概念

2.1 刺激閾値への注目

乳児はまず感覚体験を基調にして知覚を情緒に変換させる。Freud は快体験をすると緊張が緩和され不快体験では緊張や興奮の増強があり、この快（心地よさ）と不快に関連した感覚（嗅覚）が情動、情緒の原点であると述べる（1989, 2001）。Freud による乳児の最早期体験は快楽原則 Lustprinzip であり、やがて現実原則を知ることとなるというスキーマである。快感覚は閾値内の調整可能な外的刺激と関係すると思われる。Tustin F. (1981) の flowing-over-at-oneness の概念は、子宮内で保護されて母体と一緒に感覚を維持したまま誕生し外界へ流れ出るというものである。Tustin が言うように、誕生による身体的分離にも拘らず外的環境が限りなく子宮に近い状態を提供し乳児が誕生に受ける衝撃を緩和できるなら、安全の感覚を破られずにすむ。しかし、外的環境が準備されていなかったり、何らかの理由で時期尚早に体外に投げ出されたりすると、乳児にとっては耐性を超えた過酷な状況に（外的環境）に長時間、自己を護る術がないまま晒され続けるということが生じる。いい換えると、このとき情動反応は、Grotstein が、「知覚に対する構造的の早熟な感受性」といった状態を意味する。誕生後、乳児が保護下のもとで存分に欲求を出し受容される体験が、自己を良いものとして確立する基底となるものと考えると、安全感を保持できないということは、環境からの刺激を警戒や恐怖で反応する結果を誘発するといつてもよい。臨床に訪れるクライアントは既に乳幼児期を過ぎた児童であり成人であるが、彼らの訴える不安と怖れの背景には、誕生最早期の安全感を破られた心的状態と重なる部分が存在する。

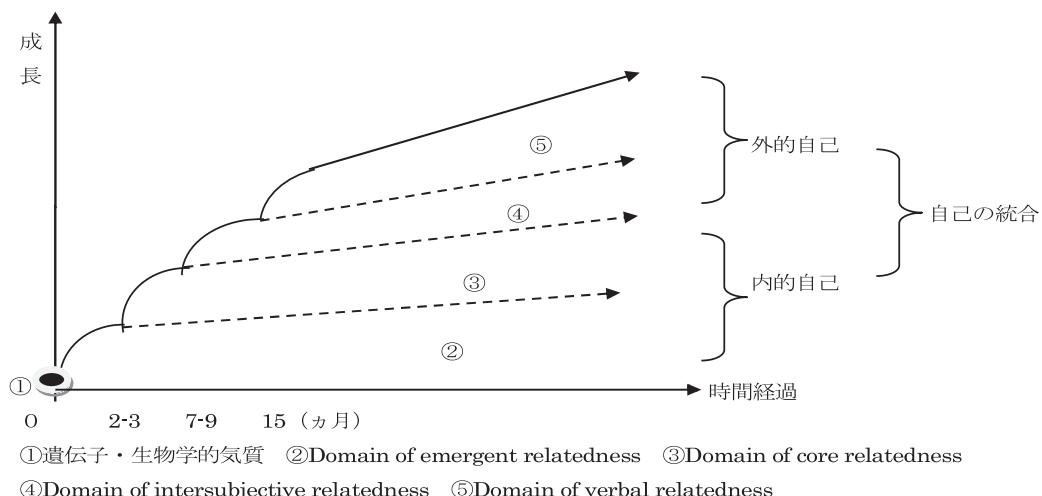
こうした心的状態を探索していくと、個々人における刺激の感受性の違いにたどり着く。生得的・先天的に刺激を感受する閾値は個人によって異なり、一生変わることがないと Stern D. (1985) は述べている。子どもを取り巻く人間やその他もろもろの社会的環境刺激に対応する能力には生まれつきの差異が存在するといえる。

2.2 発達の時間的メタファー

Stern D.の自己感の発達概念は生来的気質に注目しながらも誕生後の関係性の発達に焦点を当てている。筆者は遺伝子的・生物学的資質が固有であるという点で、自己をまず誕生以前に形成されている遺伝子や生物学的資質に注目することが妥当ではないかと考えている。そのうえで、情緒領域：萌芽（創発）自己、誕生後の環境と養育者との間主観的関わりから形成される自己意識の領域である。中核自己、社会における他人との関わり合いの領域の間主体的領域である。社会的自己、想像力や記憶力、認知力、思考力など知的能力領域における自己である。知的自己領域という自己を構成する5つの要素を考えて、時間経過の中で個としてオーガナイズされたその人特有のまとまった自己へと発達すべく、環境と絡み合いながら自己を形成していく。つまり自分をまとった自己として実感するプロセスを全ての構成要素のみならず、時間軸で捉えることができる（図1参照）。

自己は時間経過の中で可塑性を持ちつつ変化していく。まず原初的自己領域においては、生得的にオーガナイズされた感受性を快感覚として発達させていくと、外界の過剰・過少刺激に対する適切な自己制御機能となる。この領域は生まれつきの才能と言われる五感に基づく芸術分野、スポーツ分野へと発達する可能性を秘めている一方、環境設定のズレから五感への過敏性のために安定した愛着形成に失敗し不安感や不信感からを生む怖れがある。中核の自己領域は発達とともに自己意識を明確にし、至適な自己評価能力の確立となる。この領域に発達不全が生じると、自分自身の判断や情緒の言語化、本来のニーズが不明のまま不確かな自己、空虚な自己を抱いた心的状態となる。社会的自己領域の発達により、社会や機関に所属感を持ち周りの情況や周りの人と上手くフィットしている自分を感じることができる。しかしこの発達領域が阻害されると、周りと自分世界は切り離され疎外感や孤独感が生起する。能力自己領域が適切に発達すると、自分の能力の分野とレベルが至適に發揮され充足感を得るが、過不足により生氣の消失、ストレスによる圧迫感、未達成感が生じる。自己発達は内的発達にとどまらず社会の中にある自己という視点からも捉え、内外的両側の世界に存在する自己であり、また誕生から死までという時間的流れのなかにいる自己という独自の存在を指すと考えられる。時間的メタファーで表わされる。

<図1 時間的自己イメージ>



誕生後、自己調整と相互交流調整を積み重ねながら心的構造が相互交流を通して自己調整をする際、相互のやり取りから子どもが環境に適応的に生き延びて行く為に身に着ける自己調整の仕方によって誕生直後からの心的構造体である自己が決定していく。程よい関わり合いにより統合された心的構造体として自己発達が進んでいくのか、過少・過剰な外的刺激の相互性が心的に問題をきたし、不安定な心理構造体として調節困難な自己が形成されるのかという意味で、自己を考えるときその双方の概念は不可欠である。

時間的経過の中で、自己感覚の鈍麻が日常的になると慢性的な離人症または現実感喪失の状態を生じさせる。臨床場面でしばしば出会うクライアントの執拗な努力、例えば働き過ぎ、強迫的過活動、睡眠の回避、突然の興奮状態、関係性からの回避を刺激と閾値の視点から捉えると、入力される刺激に対して不適切な方法で自己調節を行おうとする病理的な試みといつてもよいのではないかと思われる。

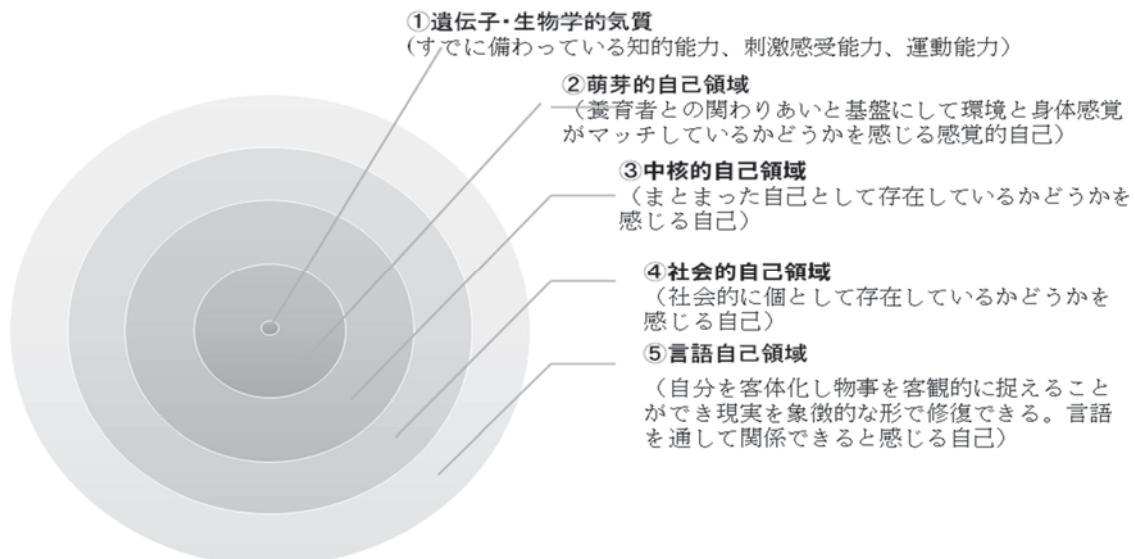
2.3 発達の空間的メタファー

Stern D. の自己感の概念は時間的メタファーだけではなく空間的メタファーにもまたがっている。自己の心的構造は空間次元の捉え方であり、自己の発達は時間次元の捉え方と言える。

乳児が誕生直後から外的刺激を受信し感じるその容態は多様であるが、すべての「ヒト」が対象と応答し他者と関わろうとする能力を備えた生き物であるということは、ここ 20 年の乳幼児研究で明らかである (Stern D, 1971, 1977.)。問題は刺激の量と質であり、それぞれに乳児の性質によって快・不快の刺激応答性が異なるということである。このことは、前述の時間的メタファーで遺伝子・生物学的気質領域を発達の誕生時に入れる必要性を述べたことと重複するが、赤ん坊は生まれたときから本質的、気質的に異なった存在である (Brazelton, 1973) ことへの注意を促したい。誕生以前に鋭敏に感じる器質的特徴を備えた子どもであるという理解が必要である。

さらに、自己は発達しつつ各領域が統合し発展していくという空間的自己として捉えることも重要である。これを図で示すと以下のようになると考えられる。

<図 2 空間的自己イメージ 林 2017>



3. 閾値を外れた刺激に対する対処

3.1 感覚プロファイル (SP) が示唆する自己感覚領域の様相

臨床場面では、精神疾患の原因の一つとして個々人の五感覚に基づく刺激閾値と刺激質量の拮抗のアンバランスに由来していると推察できるケースに多々出会う。Stern D. (1985) は個々人に異なる生来的な外的刺激受容量の閾値と過敏性や将来の不安障害との関連を示唆しているが、長らくその点は臨床においても見過ごされてきた。多くの人が馴化に過度な期待をして問題にしなかったともいえる。しかし自己意識が生まれる前の、生得的な感覚的、生理的、本能的領域の個人差が成人してからもその人のあり方に意志や意図に関係なく影響を与えていていることに対し、きめの細かい注目が払われることが心理的安定と深くかかわっている。Stern D. (1985) が提示している情動調律の概念はそれを示している。彼は前象徴的心から、象徴的心への橋渡しとして養育者と子どもの応答について重要な点に焦点を当てている。調律された体験は、何が共有可能か、何が妥当とみなされうるかを規定し、感じているにもかかわらず調律されない体験は、「私ではない体験」となりうると Stern D. は言う。養育者が調律しうるためには外的刺激に対する感受性は個々に違うことに注意を向けなければならない。この感受性は情動の快・不快を生む。「妥当性を承認されていない無意識 the unvalidated unconscious」(Stolorow, Atwood, 1992), これはつまり養育者から全く妥当性の承認を得なかつた不快情動である。生起した情動が自己意識に上らず感情として名前を付けられずこの域にとどまるなら、あいまいで、茫然として、揺れの治まらない情緒や気分となる。こうした体験の積み重ねは、自己感覚を曖昧にし心理的安寧を構築できないことと関連している。非言語的ないしは暗黙の形態での妥当性の承認を与えられず調律されなかつた体験が自己不全感覚として精神疾患症状を呈すること、それが心的問題として扱われるべきだろう。

感覚プロファイル (SP) は、日常生活における感覚処理能力を評価し、行動が感覚処理の影響をどのように受けているかその影響をプロファイルする標準化尺度として作成されている。質問は全部で 125 問あり、4 象限と関連するセクションスコアと因子スコアが出るようになっている。そこで象限と照らし刺激の処理にどのような特徴があるかをさらに深く知ることが出来る。高いスコアの象限の感覚処理が振る舞いや動作を支配している、あるいは妨げていると考える。感覚プロファイル (SP) では 5 感覚反応に加え前庭感覚処理システムも含んでいる。「調整」は神経伝達制御で、「耐久性・筋緊張に関する感覚処理」「身体の位置や動きに関する調整機能」「活動レベルに影響する運動の調整機能」など、中核の自己を確立するための身体的自己の発達を知る手掛かりとなるだろう。また感覚プロファイル (SP) の「行動や情動反応」は、感覚処理の行動に表れる結果を反映する領域であり、情動的・社会的反応にどう影響しているかを知ることができる部分でもある。すなわち自己発達概念でいう、中核自己や間主体的関わり合いの領域にも関係するものであり、日常の刺激と感覚のパターンが自己発達にとってどのように関わっているかについてそのつながりを知ることができる。

感覚プロファイル (SP) の目的として、行動のふるまいの長所と困難性を感覚処理パターンと関連づけるツールと説明している (Dunn, 1999)。本論ではさらに、自己発達の観点に立ち、自己統合を確立しようとする際その在り方に自己発達不全を生じている領域や至適な環境づくりを知るための手がかりの一つと捉えようとしている。

3. 2 Dunn の感覚プロファイル (SP) の概念—象限で捉える感覚の閾値

個々人に刺激の閾値に差があるということを、ノーマルかアブノーマルという捉え方ではなくスタンダードな発達とイレギュラーな発達のタイプがあるという見方をすれば、自己の確立を目指す道の多種多様性を理解できるのではないだろうか。

確かに Beebe (2002) が言ったように調整の柔軟性の喪失が病理のひとつの特徴であるが、見方を刺激と閾値の相互性という視点から見ると、もう少し当人の苦痛が明確に現れてくる。調整の硬直化は長年のその人流の安全を獲得しようとする誤った形態であり固着化しているため、そうせざるを得ない状態にまで陥っていると言えよう。

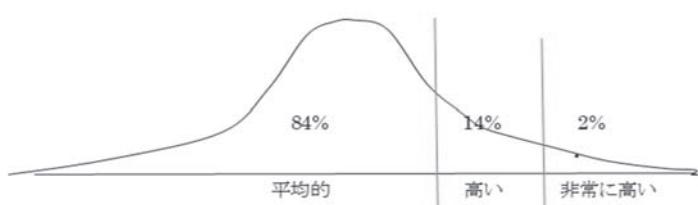
Dunn (1999) は平面を直交する二直線で仕切ってできる 4 つの部分の一つ一つという意味の象限という言葉を用いて感覚反応を 4 つのスコア領域、感覚探究、感覚回避、感覚過敏、低登録に分類した。そして、各象限は感覚処理の一側面であり生活にどう影響しているか考察されねばならない。感覚探究と感覚回避を能動的な自己調節パターン、感覚過敏、低登録を受動的な自己調節パターン、低登録と感覚探求を刺激が足りていない高閾値のパターンを表し、感覚過敏と感覚回避は低閾値のパターン示している。象限スコアは互いに独立している（図 4 参照）。

<図 4 行動反応・自己調節と神経学的閾値の関係 Dunn 1997>

神経学的閾値の連続体	行動反応・自己調節の連続体	
	受動的	: 能動的
高閾値(馴化)	低登録	: 感覚探究
低閾値(鋭敏化)	感覚過敏	: 感覚回避

Dunn の研究では、（図 5）に見るように<平均的>は定型的な感覚処理能力を示しており、全体の約 84%が定型感覚処理能力可能であることを示している。<高い>は感覚処理能力に問題がある可能性を示しており、全体の約 14%が感覚処理能力に疑問の余地があることを示している。<非常に高い>は感覚処理に問題があることを示しており、全体の約 2%が環境についていくのに苦労したり、自身や他者に対して破壊的なふるまいをしてしまう可能性があることを示している。<高い>あるいは<非常に高い>を示す子どもに共通してみられる独特な行動は、子どもが不正確あるいは不十分な感覚場を基に、日常生活を送ろうとしていることを表していると Dunn は言う。Thomas ら (1970) は、乳幼児の気質のタイプとして、35%が平均的なタイプで 40%は新しい状況にも難なく調整可能で日常化でき、概して快活で落ち着きを取り戻しやすい。また 10%は気難しいタイプで、新しい経験や出来事に慣れるのが遅く、定式化するのに否定的で緊張を伴う反応をし、15%が前述のタイプ程ではないにしても最初、幾分馴染みにくく時間がかかる、という結果を出しているが子どもの環境への馴染みにくさという点両者の結果は興味深いものがある。

<図 5 正規分布と感覚プロファイル (SP) の分類システム Dunn 1999>



生来的に鋭敏な感受性を持つ場合、年齢によっても刺激の感じ方は違うとはいっても傾向が変わることはない。発達過程で自分自身が安全であるという幻想 *reverie* で護られるためには、Stern D. (1985) のいう「まとまりのある自己」であるという感覚を発達させることができるかどうかである。つまり、至適な刺激を体験し、その中で自分の感情、欲求、生来的自律性が認められ支持されるかどうかにかかっていると思われる。これは Stern D. の感覚と閾値の概念がある意味更に具体的に検証した結果であるといえる。Dunn の示した刺激と閾値の状態を Stern D. の概念に照らして視覚化すると次のような図が考えられる。

<図 6 Stern D., 1985 の概念を林が SP 象限概念を参考に作成、2019>

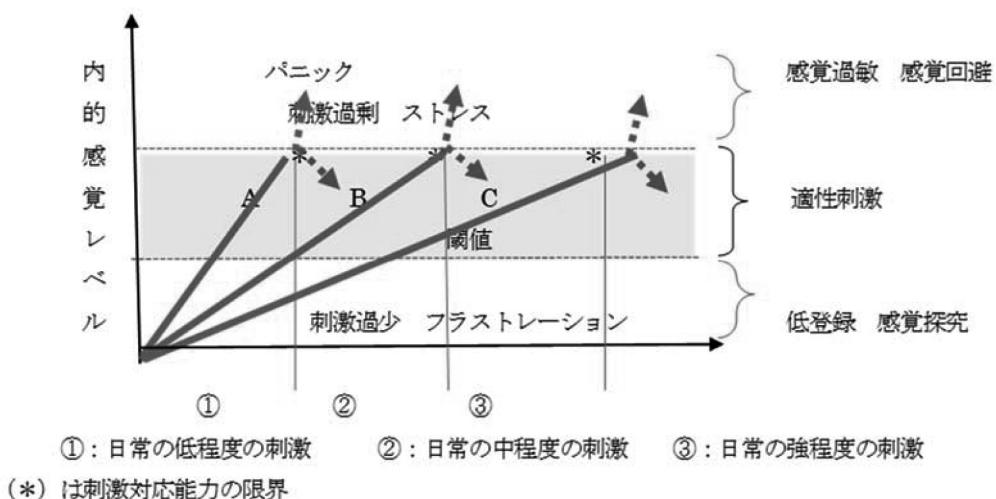


図 6 は間主観的な乳児-母親システムの観点から乳児の情動的覚醒を耐えられる範囲内に調整することができなければ、過剰または過少覚醒の中で混乱やフラストレーションという不快な状態に陥り否定的感情で応答するという Stern D. の刺激と閾値の関係を示したものに、Dunn の概念を重ね、林が作成したものである。②の日常の中程度の刺激が入力した時、B の反応が一般的なものだとすると、A は中程度の刺激ですでに閾値の上限に達し感覚過敏か感覚回避の状態になることを示している。C は中程度の刺激では閾値に達し難く低登録や感覚探究の状態を生じることを示している。

日常的な刺激と閾値との不一致が適正な自己感覚や自己平衡感覚を脅かす要因となる。Winnicott (1958, 1960, 1965, 1971) は乳幼児における「原始的苦悩 primitive agony」について触れ、こうした状況が生じると、「想像を絶する unthinkable 不安」が生じると述べているが乳幼児に限らず、成人においてもこうした状況では、「自分がバラバラになる感じ」「何の方向付けもない感じ」「自分が落ち続けていく感じ」「自分が存在しない感じ」「誰ともつながっていない感じ」といった心理状態を引き起こす。感覚と閾値の不適応状態が、自己感覚の障害、つまり断片化（一貫性の崩壊）、行為や意志の麻痺（発動性の崩壊）、虚無（連続性の崩壊）、解離（情動性所有権の崩壊）という精神疾患レベルを引き起こす原因になるということである。入力される刺激には、①感覚への感受性に基づくもの、②運動能力に基づくもの、③知的能力に基づくもの、という感覚の種類も念頭に置くことで、刺激と閾値の均衡が自己感領域全域に関与するということを示唆する。

4. 事例

4.1 成育歴と来談までの経緯

Yは20代前半の浪人生である。乳幼児期には生後1か月で小児外科処置の必要な疾患を発症、生後7カ月で内科的疾患を発症したが現在は完治している。児童期は恥ずかしがり屋で怖がりであった。特に暗闇を怖がり、それは現在まで続いている。記憶力がよく、年月日や場所、相手が何を言ったかをよく覚えており、4歳離れた姉と口喧嘩をしても負けなかった。中学受験の為に頑張り合格したものの「くさい」と誰かがいつたことを自分に向けて言わされたと感じ、友人関係に緊張を伴うようになり中学1年の冬に学校に行けなくなった。こども心身医療機関で強迫性障害（匂い恐怖症）と診断され薬物療法を受ける。B国へ短期留学する。ペーパー試験が良かったため上級クラスに配属されるが、会話や日常のコミュニケーションの仕方を外国からの参加者に揶揄されクラスを下げてもらう。高校は自然の中でゆっくり過ごせるところを選択し寮生活を送りながら部活も頑張るが、自分がどう思われているのか気になりはじめ自室から出られなくなる。そのまま登校できなかった。後、予備校や個別家庭教師で受験勉強を進めるも、醜形恐怖、視線恐怖で動けなくなる。森田療法も効果がなく紹介で筆者と出会った。

4.2 アセスメントのためのSP検査

Yの来所に至るまでの経緯を見ると、他者からの目線への過敏性が顕著である。その発端は嗅覚や視覚に関する感覚のあり方の誤った取り込みの仕方が強迫性を生み、自己の不確実性に結びついて不安を増幅させていると推察される。そこで身体疲労と感覚対処のパターンを把握するためにSPプロファイルを行った。Yのスコアの結果は以下の様であった。

<象限別スコア>

象限	象限スコア合計	分類
1. 低登録	36/75	36●…75 非常に高い
2. 感覚探究	40/130	26…●41 平均的
3. 感覚過敏	49/100	42●…100 非常に高い
4. 感覚回避	78/145	75●…145 非常に高い

「低登録」「感覚過敏」「感覚回避」が<非常に高い>領域にあり、「感覚探究」は平均的である。

身体感覚には、五感覚と固有覚と前庭覚がある。固有感覚は自分の身体が意識できるので、ボディイメージが形成され暗いところでもどこを歩いているかを察知できる。前庭感覚とは、重力や回転、加速、傾き、揺れなどを感じ取る感覚。頭の角度を傾けることを嫌がったりするなどがある。

前庭感覚と聴覚も関連があり、選択的に集中して音を聞き取ろう、聞き分けようとすると、やはり全身の姿勢のコントロールや呼吸のコントロールの力が必要となるため、教室で教師の話だけを集中しようとすると身体的にも神経的にも非常に緊張を強いることになる。その為自分では、疲れやすく直ぐ苛々したり集中力が持続できないと感じる結果になる。

Yの検査結果を表にすると以下のようになる。

神経学的閾値の連続体	行動反応・自己調節の連続体	
	受動的	能動的
高閾値 (馴化)	<p>低登録:感覚入力を逃してしまう程度</p> <p>*道に迷う</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>→目印を見つけられないと、目印や経路を記憶していないこと、地図や空間をイメージできていないことなど⇒視覚:ごちゃごちゃしている中からものを探すのはいらいらすると関連</p> </div> <p>*動きが硬い、一定の姿勢で疲れやすい、筋力が弱い、握力が弱い、耐久力が弱い・疲れやすい</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>→重力や回転、加速、傾き、揺れなどを感じ取る感覚が働かない⇒前庭感覺</p> </div>	<p>感覚探究:感覚入力を得る程度</p> <p>*特定の匂いを非常に好む:柑橘類特定の味を非常に好む、特定の食べ物を欲しがる</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>→ 味覚 嗅覚 觸覚</p> </div> <p>*動きのある活動中オーバーに興奮する、いつも動き回っている</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>→ 触覚、固有感覺</p> </div>
低閾値 (鋭敏化)	<p>感覚過敏:感覚入力を検出程度</p> <p>*AV の音が流れていると課題に集中できない、周りが騒々しいと気が散ったりうまく活動できない</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>→聴覚</p> </div> <p>*足が床についていないと心配になったり苦痛を訴える</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>⇒固有感覺:自分の身体が意識できる、ボディイメージ形成</p> </div> <p>*頭が下になる運動や遊び(荒っぽい)は嫌い、降りる事や高いところを怖がる、上り・ジャンプやでこぼこ道を避ける</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>→重力や回転、加速、傾き、揺れなどを感じ取る感覚が働かない⇒前庭感覺</p> </div> <p>*食べ物で特定のものにおいや味を嫌う、食感に関連して偏食である</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>→味覚 觸覚 嗅覚</p> </div>	<p>感覚回避:感覚入力に悩まされている程度</p> <p>*突然の大きな音(耳を覆ったりしない)に拒否反応を示す、周りで音がしていると作業が出来ない</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>→聴覚</p> </div> <p>*光から目を護るように目を閉じたり細めたりする</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>→視覚</p> </div> <p>*前かがみになったり、後ろにもたれている時でも頭を垂直に保つ</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>→重力や回転、加速、傾き、揺れなどを感じ取る感覚が働かない⇒前庭感覺</p> </div> <p>*汚れるのを嫌う</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>→触覚</p> </div> <p>*絶対的に怖いものがある(予測可能)、日々の生活に影響するほど怖いものがある</p> <p>*どちらかというと静かに座ってやる遊びを好む(TV,読書 PC)</p> <p>*心配性だ、作業に失敗すると過度の感情爆発がある、どちらかというと頑固で融通が利かない、イライラへの我慢が出来ない、すぐ泣く、過度の真面目。</p>

<セクション別スコア>

感覚処理	セクションスコア	分類
A. 聴覚	22/40	17…●…26 高い
B. 視覚	19/45	15…●…21 高い
C. 前庭覚	21/55	17…●…23 高い
D. 觸覚	24/90	18…●…24 平均的
E. 複合感覚	11/35	10…●…14 高い
F. 口腔感覚	30/60	17…●…20 高い
調整		
G. 耐久性・筋緊張に関する感覚処理	27/45	24●…45 非常に高い
H. 身体の位置や動きに関する調整機能	20/50	15…●…22 高い
I. 活動レベルに影響する運動の調整機能	14/35	7…●…16 平均的
J. 情動反応に影響する感覚入力の調整機能	6/20	6…●…9 高い
K. 情動反応や活動レベルに影響する視覚の調整機能	14/20	11●…20 非常に高い
行動や情動反応		
L. 情動的・社会的反応	63/85	52…●…85 非常に高い
M. 感覚処理による行動の現れ	12/30	6…●…13 平均的
N. 反応の閾を示す項目	4/15	3…●…4 平均的

<因子スコア>

因子	因子スコア	分類
1. 感覚探究	22/85	17…●…29 平均的
2. 情動的反応	63/80	52…●…80 非常に高い
3. 耐久の低さ・筋緊張	27/45	24●…45 非常に高い
4. 口腔感覚過敏	26/45	23●…45 非常に高い
5. 不注意・散漫性	18/35	15●…22 高い
6. 低登録	11/40	10…●…16 高い
7. 感覚過敏	17/20	10…●…20 非常に高い
8. 寡動	6/20	4●…11 平均的
9. 微細運動・知覚	3/15	3…●…5 平均的

【結果の考察】

象限「低登録」は馴化、視点を変えると感覚入力を逃してしまう程度を表わしているが、A の場合非常に高いスコアに表れているのは、2 つの領域に分類できる。1 つは<道に迷う>で視覚関連すると考えられる。知能テストでは<記号探し>の下位検査に連動するが、刺激を逃すところであり、多くのものの中から特徴的なものを抽出して目印にするということが難しいことが起因するためと捉えられる。2 つ目は、<動きが硬い、一定の姿勢で疲れやすい、筋力が弱い、握力が弱い、耐久力が弱い・疲れやすい>がある。これらは前庭感覚が関与していると思われる。入る刺激に対して取り逃がしてしまう感覚、つまり敏感に機能しないことが起因している。

象限「感覚探究」は感覚入力を得る程度を表わしている。A のスコア自体は低いが(刺激)活性化を求める点では2 つの領域があることがわかる。1 つは<特定の匂いを非常に好む—特に柑橘類特定の味を非常に好む、特定の食べ物を欲しがる-肉というように味覚と嗅覚、更には触覚もいくぶん関連しているかもしれない。柑橘系はストレスやクエン酸との科学的根拠は別にしても、感覚に対して刺激性が強く嗅覚に対して

は耐性があることを示していると言えよう。中学時代に「くさい」に反応している点と同関連しているのかを注意したい。2つ目<いつも動き回っている>と、象限「感覚回避」のどちらかというと静かに座ってやる遊びを好む(TV, 読書PC)という点に矛盾がある点に注目したい。<動きのある活動中オーバーに興奮する、いつも動き回っている>では、触覚と固有感覚において強い刺激でないと体感が得られない可能性を含む。

象限「感覚過敏」は感覚入力の検出程度、つまり感覚入力に気づいて反応する度合いを示している。Aの場合非常に高いスコアに表れているのは6つの領域においてである。1つ目は<AVの音が流れていると課題に集中できない、周りが騒々しいと気が散ったりうまく活動できない>に示されるように聴覚で多くの音を拾う、または微かな音にも反応することが考えられる。2つ目は<足が床についてないと心配になつたり苦痛を訴える>に見られる固有感覚、3つ目に<頭が下になる運動、遊び(荒っぽい)は嫌い、降りる事や高いところを怖がる、上り・ジャンプやでこぼこ道を避ける>に見られる前庭感覚、4つ目と5つ目と6つ目に<食べ物で特定のものにおいや味を嫌う、食感に関連して偏食である>という嗅覚、味覚、触覚の領域である。嫌な匂いや味にいち早く反応し好ましい匂いや味(柑橘系と肉)への欲求の格差が存在する。

象限「感覚回避」は感覚入力に悩まされている程度のことで感覚入力から逃げていることを示している。Aの場合非常に高いスコアで示されている内容は、4つに分類できる。その1つ目は<突然の大きな音(耳を覆つたりしない)に拒否反応を示す、周りで音がしていると作業が出来ない>に見られる聴覚に係る領域である。2つ目は<光から目を護るように目を閉じたり細めたりする>に見られる視覚の領域、そして3つ目は、<前かがみになったり、後ろにもたれている時でも頭を垂直に保つ、静かに座ってやる遊びを好む(TV, 読書PC)>という前庭感覚領域、また<絶対的に怖いものがある(予測可能)、日々の生活に影響するほど怖いものがある>。Aは暗さと高さに恐怖に近い怖れを抱いており、前庭感覚に加え固有感覚の問題から生起している可能性がある。4つ目は<汚れるのを嫌う>という点で、触覚、視覚との関連を考えられる。

あと、鋭敏性に能動的反応がみられるのは<心配性だ、作業に失敗すると過度の感情爆発がある、どちらかというと頑固で融通が利かない、イライラへの我慢が出来ない、すぐ泣く、過度の真面目>などがあるが、これらは自己感の発達領域という視点から見ると、萌芽(創設)領域におけるAが生来的に持つ閾値と不適切な刺激との絡み合いの結果と捉えることができる。自己感発達の中核自己感における、自分の身体は自分の思うように動き意志と連動して一致していることで自己感の安定につながるという意味で、萌芽自己領域の外界刺激との不適合が中核児領域に不全を招いている。情動的・社会的反応は自己感発達間主体的自己に相当すると考えられるが、この領域でも<自分が好きになれない。状況に対し幼稚に反応する。批判に敏感である。あたかも失敗したのように感情表現する>に見られるように自己不全感を抱いていることがわかる。ユーモアのセンスは自分や周りから距離をとって眺めるというメタ認知能と関わっていると考えられるが物事を近視眼的に自己に埋没しているともいえる。最も彼の不全状態を象徴しているのは<感情を説明しない>という点であり、すべてが知的操縦で対応しようとしていることを示しており、自己発達視点からは重大な点である。

5. まとめ

馴染みのない刺激・嫌悪刺激入力を制限することは勿論であるが、低登録と刺激探求との特徴を見る事などセンサープロファイル (SP) のより詳細な感覚対処パターンは、臨床場面でクライアント支援に具体的で的確な示唆を含んでいる。Stern D.の自己感の発達概念は誕生時から関係瀬の中で発達するという双方向性を重視した間主観性理論に基づいている。自己の統合を図るために間主観性理論における治療的作用へのパーソナルな意味の解明（認知的理解）は、自己理解、自己輪郭化、自己連続性、自己融和性を促進する (Buirski P.&Haglund P., 2001) ことと関係すると考えられる。Thomas and Chess の研究は、子どもの健全な発達は“適合のよさ goodnss of fit”の程度、つまり子どもの気質が能力と環境の諸条件と調和するときに生じると考えており、身体感覚と情動・意志・活動の一一致感のなしにはまとまったものとしての自己を確立することは難しい。そのもっともベースになるものが刺激と閾値の相互的調整ともいえる。不適切な長期の閾値の逸脱への暴露、いいかえると情動的覚醒を耐えられる範囲（閾値内）に調整することができなければ、否定的な感情が生じ、過剰または過少覚醒化、混乱という嫌悪や苦痛の情動状態に置き去りにされることになる。自己統合の確立は、現実的な野心、自分は発動者 agency (cf. free agent 自由行為者《自分の行為を自らが決定できる人》) であるという感覚、そして自分は愛される価値があるという信念を特徴とする。心理的構造を構築することによって治癒をもたらすと Kohut (1984) は述べているが、構造の構築の最も原始的なものは感覚と閾値への注目であると言っても過言ではないだろう。

【参考文献】

- Beebe B., Knoblauch S., Rustin J., Sorter D. (2005) : Forms of Intersubjectivity in Infant Research and Adult Treatment. Other Press.London. England. 丸田俊彦監訳 (2008) : 乳児研究から大人の精神療法へ－間主観性さまざま－.
- Dunn W (1999) : Sensory Profile. NCSPearson.Inc. 辻井正次監修 (2015) : 日本版感覚プロファイル. 日本文化科学社.
- Freud, S. (1914) : On Narcissism.Standard Edition, 14:69-102. London: HogarthPress. 1957. 懸田克躬・吉村博次訳 (1969) : ナルシシズム入門、フロイト著作集第5巻、人文書院.
- 林知代 (2018) : 自己発達における Intersubjective(間主体的)自己領域に関する心理臨床学的考察. －Kohut から Stern への自己の発展的概念を中心にして. 芦屋大学論叢第69号, pp 67-75.
- Kohut, H. (1971) : The Analysis of the Self. New York:International University Press. (水野信義, 笠原嘉監訳、「自己の分析」, みすず書房, 1994).
- Kohut, H. (1977) : The Restoration of the Self. Madison:International University Press. (本城秀次, 笠原嘉監訳、「自己の修復」, みすず書房, 1995).
- Mollon, Phil (2001) : Releasing the Self: The Healing Legacy of Heinz Kohut. Whurr Publishies Ltd.
- Stern D. (1985) : The Interpersonal World of the Infant : A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. Basic Books, Inc.
- Stolorow, R., Brandchaft, B. & Atwood,G. (1987) : Psychoanalytic Treatment : An Intersubjective Approach. New Jersey:Analytic Press. 丸田俊彦訳 (1995) : 「間主観的アプローチ」, 岩崎学術出版.
- Stolorow, R., & Ateood, G. (2013) : Metaphysicalizing experiential selfhood : Reply to Tomas Videgaard. International Journal of Psychoanalytic Self Psychology, 8, 121-125.

